

國學院大學學術情報リポジトリ

台湾系日本語学習者の音声上の諸特徴に関する通時的対照：日本語教育史的観点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-04-19 キーワード (Ja): 誤用分析, ー2型アクセント, 一型アクセント, 台湾系日本語学習者, 「台湾方言」 キーワード (En): 作成者: 上出, 大河 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000310

台湾系日本語学習者の音声上の諸特徴に関する通時的対照 －日本語教育史的観点から－

上 出 大 河

論文要旨

従来の日本語教育史領域の研究では、教授法や教材、教具等についてを主たる分析対象とする研究が多数であったが、言語学習における最大の目標が学習者の目標言語習得であることを踏まえれば、学習者の用例を通時的な観点から分析し、日本語教育史領域の知見として蓄積することもまた重要であろう。本稿はこのような問題意識に立脚し、組織的な日本語教育の嚆矢的实践の地である植民地期台湾で報告された各種用例を音声の面から分析し、現代の^{タイワンケイ ニ ホン ゴ ガクシユウシヤ}台湾系日本語学習者の用例と対照することで、その質的変遷の有無について明らかにすることを目指すものである。植民地期台湾における本島人の用例を音声的に分析した寺川喜四男は、^{マイナス 2 ガタ あく せ ん と}－2型アクセントと^{イクケイ あく せ ん と}一型アクセントの特徴が見られることを「^{タイワンホウゲン}台湾方言」の特徴と指摘している。本稿では特にこの特徴の史的連続性の有無に着目し、植民地台湾における用例の特徴及び台湾系学習者の音声習得上の通時的困難について記述的に論ずる。

キーワード：^{ゴヨウブンセキ}誤用分析、^{マイナス 2 ガタ あく せ ん と}－2型アクセント、^{イクケイ あく せ ん と}一型アクセント、^{タイワンケイ ニ ホン ゴ ガクシユウシヤ}台湾系日本語学習者、^{タイワンホウゲン}「台湾方言」

1. はじめに

台湾系日本語学習者の集団的な日本語学習の歴史は、下関条約締結後の台湾割譲に伴う国語（日本語）教育の嚆矢的实践の時期にまで遡る。

また、植民地期台湾における国語（日本語）教育を対象とした研究はこれまで、社会言語学領域や教育学領域、日本語教育史領域等様々な学問領域で一定数の蓄積がなされている。特に日本語教育史領域では、教授法・教材・教具の歴史的変遷について、資料に基づいて実証的な議論に耐えうる論が多く発表されており、常に一定の関心を喚起してきたものと評価してよいであろう。

しかしその一方で、当時の学習者の発話の実態に着目し言語的特徴に関して分析を加え

るということを主眼とした研究は、他の研究と比較して未だ僅少であると言わざるを得ない。当然ながら言語学習の最大の目的は学習者の言語習得であり、学習者の誤用、中間言語の質的な推移を十分に検討せずに教授法・教材・教具について論ずることは必ずしも有益な知見を引き出すものではあるまい。そこで本稿では、植民地期台湾における学習者の音声的特徴と現代台湾系学習者の音声的特徴を対照し、そこに見られる質的な変遷の有無について記述し、日本語教育史領域に用例に基づく通時的な知見を加えることを目指すこととしたい。

仮に植民地期台湾の学習者の発話に確認された音声的特徴が現代の学習者の発話にも確認されるとすれば、それは台湾系学習者の日本語習得に通時的な難点が存在することを示唆し、その部分に重点を置いた音声指導の必要なことが明らかになるであろう。また、仮に植民地期台湾の学習者の発話に確認された音声的特徴が現代の学習者の発話には確認されないとしたら、植民地期台湾における国語（日本語）に特有の特徴として処理しうするため、これも学習者の用例に関する日本語教育史的な知見として重く受け止められるべき事柄と位置付けられるであろう。

2. 植民地期台湾における音声資料について

日本による台湾統治は約半世紀にも亘り、最長の統治期間を有す領有地であった。そのため、他の領有地と比較すれば言語資料として分析に援用しうる対象が多く、『御大礼記念児童文集』（1929年）や『全国小学児童綴方展覧会』（1936）等公刊された作文資料や未刊の作文等は、文法形式等の観点からの分析を一定程度可能にすると思われる。しかし、音声資料に関しては、管見の限り僅少、あるいは皆無であるため、分析を行う上でも非常に大きな制約を受けることとなる。そのためにこの領域に関する分析を行う上では、実際の生の音声資料と比較すれば問題が多いが、当時の内地人による音声的な観察を援用して分析を進めることが必要である。

内地人による非母語話者の言語観察は台湾以外の他の植民地も含め領有初期から行われており、台湾総督府国語学校教員としてその任にあたった山口喜一郎が1903年に「国語教授の際に気付きし児童発音の誤りに就きて」（『台湾教育学会雑誌』十七号）を発表した例を初め、一定の蓄積が存在する¹。それらの観察の中には用例の単純な列挙にとどまるレ

1 他の領有地においても、朝鮮で官立漢城外国語学校が1911年に『国語の発音及語法に関する調査』を取りまとめて報告されている他、統治末期にあたる1944年にも『日本語』四巻四号において「母国語語法の影響」なる特集が組まれている。

ベルの報告から現代の第二言語習得研究における誤用分析に通じうるレベルの報告まで幅広く蓄積されてきた。

その中でも、植民地期台湾における本島人の音声を最も詳細に分析した人物は寺川喜四男（1910－1987）であろう。寺川の1938年度提出早稲田大学国文学専攻卒業論文の題目が「北部台湾に於て福建系本島人の使用する国語のアクセント研究」であったことからもうかがえる通り、彼の専門はアクセント論であり、寺川による調査、分析の中では常にアクセント及び音声に関する領域が主たる検討課題となっている。このような経歴のためか寺川の用例採集は音声記号等を用いた言語学的な一定程度のクオリティを有しているため、本稿でも寺川の報告を便宜的に活用して論を進めることとしたい。繰り返しになるが、生の音声資料と比較すれば内地人による文字化された報告は実際の発話をどの程度正確に反映しているのかという点で疑問が残る。そのため、その他にも山口（1903）、川見（1942）、平松（1942）等に見られる報告を重層的に援用することで可能な限り正確な知見を得ることを目指したい。

3. アクセント上の特徴

寺川（1942：122、133）は、台湾方言におけるアクセント上の最大の特徴として「語末から二番目の音節は『上』音で発せられ、語尾においては『中』か『下』で発せられる」という点と「アクセントは『単一型』であるから、同じ音節の語は必ず同アクセントといふわけで、音量の等しくなつたこれ等の各語は、最早言ひ分けることも聞き分けることも出来ない」という点を挙げている。寺川の指摘するこれらの特徴はそれぞれ現代の用語における「－2型アクセント」、「一型アクセント」に相当するものと思われる。一型アクセントに関しては、類似するアクセント体系が内地方言にも部分的に見られる²ため、寺川が植民地期台湾における日本語を「台湾方言」として位置づける際の重要な論拠となっていたが、現代の学習者の特徴として種々の誤用採集ではあまり報告されておらず、稿者の観察においてもまた一型アクセントの特徴は基本的には確認されなかった。しかし、－2型アクセントに関しては、現代の台湾系母語日本語学習者にも広く認められる特徴であることが知られており、植民地期台湾に見られた特徴が現代にも連続している例として考えられる。

先行研究においては、蔡（1977：92）が「台湾式アクセントは台湾語の八声と六声によ

2 一型アクセントは、宮崎県小林市～都城市～鹿児島県曾於市～志布志市の各一部等に見られる特徴であるとされる。

るものだが」と自明の理由として母語の干渉（負の言語転移）を挙げているように、多くが台湾語の声調にその生起要因を求めているが、このような姿勢に対して陳（2016）は、台湾語を使用できない若年層においても－2型アクセントの特徴が見えることから疑義を呈している。

本稿でもこのような先行研究の指摘を踏まえ、台湾系日本語学習者を対象に－2型アクセントの特徴の有無を探る調査を行った上で、その生起要因の一端としての日本語初級教科書に見られる語のアクセント型の特徴を検討することとする。台湾系学習者の日本語運用に－2型アクセントの特徴が見えることは植民地期台湾における寺川の観察の他、戦後も広く指摘されてきたが、近年そのような特徴を調査した上で提示した研究は僅少であるため、まずはその観点から調査結果を示すこととしたい。

3-1. 現代の台湾系日本語学習者の－2型アクセントの傾向調査

<対象>

稿者自身が講師を務める江東区文化センター内「プランタンにほんごきょうしつ」に在籍中、あるいは過去に在籍しており協力を得られた台湾系の受講生18名の発音を観察する。「プランタンにほんごきょうしつ」は地域在住日本語学習者の言語習得を支援する組織であり、その性質上、パートナーの職務上の都合等で来日したが日本語運用能力が乏しいために日常生活に支障をきたし、学習を開始したというような背景を有する学習者も多く、法務省告示の日本語学校に在籍する学習者とは年齢等の面で学習背景を異にする学習者の比率が高い。観察の対象としたのはいずれも日本語能力試験（Japanese-Language Proficiency Test）N5、N4レベル相当の初級学習者であり、年齢は20代～40代で来日以前にはほとんど日本語学習の経験が無い生徒である。

<方法>

本調査においては二段階の調査を実施し、台湾系日本語学習者における－2型アクセントの傾向を調査する。

まず調査Ⅰでは、調査協力者の未習語で、かつ規範的な標準語アクセントでは－2型アクセントで発音されない20語をピックアップし、ルビと助詞ガを付した状態で調査協力者に視覚的に提示し、それらを読み上げさせることによって、未習語のアクセントをどのように処理する傾向が見られるのかを調査する。

次に調査Ⅱにおいては、調査協力者の既習語で、こちらも規範的な標準語アクセントでは－2型アクセントで発声されない20語をピックアップして調査Ⅰと同様の手法で読み上げ

させ、未習語と既習語のアクセント処理の差異及び－2型アクセントの傾向との関係について調査することとする。なお調査に用いた語は以下に示した通りである。また、アクセント型に対する類推が働かぬように出題順は以下の表における順番とし、アクセント型を分散させる形とした。

【調査Ⅰ】使用語

	使用語	標準語アクセント
1	科学	－3型
2	大統領	－4型
3	粗大ごみ	－4型
4	コンテスト	－5型
5	地獄	－1型
6	哀れ	－3型
7	宗教	－4型
8	プライバシー	－5型
9	逮捕	－3型
10	奥様	－4型
11	絵葉書	－3型
12	通訳	－3型
13	定義	－3型
14	ぼやき	－1型
15	経済	－4型
16	一人暮らし	－3型
17	案外	－4型
18	差別	－3型
19	のし袋	－3型
20	忘年会	－4型

【調査Ⅱ】使用語

	使用語	標準語アクセント
1	カメラ	－3型
2	先月	－4型
3	春休み	－3型
4	ネクタイ	－4型
5	クラス	－3型
6	水	0型
7	毎日	－4型
8	コンサート	－5型
9	土曜日	－3型
10	タクシー	－4型
11	家族	－3型
12	クリスマス	－3型
13	何歳	－4型
14	トイレ	－3型
15	名前	0型
16	挨拶	－4型
17	果物	－3型
18	ポスター	－4型
19	海外	－4型
20	自動販売機	－3型

<調査結果>

調査結果をそれぞれ表にまとめると以下ようになる。なお、表における番号は先に示した使用語の番号と対応しており、「正答率」とは調査協力者18名のうち、規範的な標準語アクセントでその語を発音できた者の比率、「－2型率」とは規範的な標準語アクセントで該当語句を発音できなかった者のうち、－2型アクセントでその語を処理した者の比率を指す³。

3 以下の表では、小数第二位切り上げ後の数値を表示するものとする。

【調査Ⅰ】調査結果

	正答率	－2型率
1	50.0%	66.6%
2	33.3%	75.0%
3	22.2%	71.4%
4	22.2%	71.4%
5	11.1%	93.8%
6	38.8%	63.6%
7	33.3%	66.7%
8	27.7%	76.9%
9	38.8%	62.5%
10	50.0%	66.7%
11	27.7%	61.5%
12	33.3%	83.3%
13	22.2%	88.2%
14	11.1%	94.1%
15	55.5%	50.0%
16	22.2%	64.3%
17	33.3%	66.7%
18	22.2%	64.3%
19	16.6%	73.3%
20	27.7%	61.5%

【調査Ⅱ】調査結果

	正答率	－2型率
1	94.4%	100%
2	77.8%	50.0%
3	77.8%	75.0%
4	88.9%	100%
5	72.2%	60.0%
6	55.6%	75.0%
7	77.8%	50.0%
8	72.2%	60.0%
9	72.2%	80.0%
10	77.8%	75.0%
11	94.4%	100%
12	66.7%	66.7%
13	72.2%	60.0%
14	88.9%	50.0%
15	61.1%	71.4%
16	72.2%	80.0%
17	72.2%	60.0%
18	77.8%	50.0%
19	83.3%	66.7%
20	66.7%	83.3%

未習語を用いた調査Ⅰの正答率に関しては、11.1%～55.5%の間で分布しており、未習語を規範的な標準語アクセントで発音することの困難さがうかがえる。特に、既習の6「水」、15「名前」、未習の5「地獄」、14「ほやき」のような平板型、尾高型で発声される語の正答率の低さが際立っており、これは助詞を付さない場合の語の部分に核を付したために誤答として扱われた例が多数であった。また誤答として処理した例のうち、－2型で発声された語は50.0%～93.8%の間で分布しており、誤答の半数以上が－2型で発声されるという傾向が確認された。

また、既習語を用いた調査Ⅱの正答率に関しては、55.6%～99.4%の間で推移しており、既習語においては標準語アクセントの習得がかなりの部分で進んでいくことがうかがえる。しかし、誤答として処理した発音の中では－2型で発音された例が50.0%～100%の間で分布しており、おおよそ未習語における誤答のアクセントの傾向と類似した結果が得られた。

この結果からは、既習語、未習語に関わらず習得に至っていない語は－2型アクセント

で処理するという台湾系学習者の発音の傾向がうかがえる。これは植民地期台湾における音声上のアクセント上の特徴として寺川が報告している傾向と一致しており、台湾系学習者の日本語アクセント習得に通時的な傾向が存在することを示唆しているものと思われる。しかし、植民地期台湾の学習者と現代の台湾系学習者ではリングフランカや学習に使用する教材等の面で多くの差異が存在する。特に本調査において対象となったのが、張（2012）において他の年代よりも大幅な台湾語運用能力の低下が指摘されている20代～30代であったことを踏まえれば、陳（2016）が類似の指摘をしている通り、台湾語の声調が－2型アクセントの単一的な生起要因となっていると結論づけることには少なからぬ疑問が残る。

そこで、本稿においては－2型アクセントの生起要因として母語干渉以外の要素を検討すべく、現行の初級日本語教科書に見られる単語のアクセント型について追加調査を行い、教科書における単語のアクセント型の傾向が－2型アクセント生起に何らかの影響を及ぼした可能性について考察していくこととする。

3-2. 現代初級日本語教科書に見える語のアクセント型の傾向調査

<対象>

先の調査で協力を得られたプランタンにほんご教室の受講生たちは、いずれも『みんなの日本語初級 I』（2012）を教科書として使用しているため、受講生に最大の影響を与えたとされる『みんなの日本語初級 I』を中心に調査するが、この教科書に何らかの特殊性が存在する可能性も考えられるため、その他の初級日本語教科書二冊も調査の対象に加え、以下の三冊を調査の対象とした。なお、陳（2016）でも類似の調査が行われているが、本稿ではここで扱われていない教科書を2冊加えて調査している。

- ・『みんなの日本語初級 I 第2版』（2012）スリーエーネットワーク
- ・『できる日本語 初級』（2011）できる日本語教材開発プロジェクト
- ・『初級日本語 新装版』（2010）東京外国語大学留学生日本語教育センター

<調査方法>

調査に際しては、国立国語研究所・共同研究プロジェクト「日本語教育のためのコーパスを利用したオンライン日本語アクセント辞書の開発」（代表：峯松信明）の一貫として整備されたオンライン型アクセント辞書 OJAD（Online Japanese Accent Dictionary）を活用した。各初級日本語教科書に使用されている語句における平板式アクセントと起伏式

アクセントの比率を調査した上で、起伏式アクセントとして処理された語の中のアクセント型の比率についても調査することで初級日本語教科書におけるアクセント型の特徴を探るものとする⁴。

＜調査結果＞

調査結果をそれぞれ表にまとめると以下になる。左右に配置した表のうち、左側は教科書中の全語における平板式アクセントと起伏式アクセントの比率であり、右側は起伏式アクセントとして処理された語の中のアクセント型の比率を表す。

【表1 『みんなの日本語初級Ⅰ 第2版』 中全701語のアクセント型の傾向】

アクセント型	比率	アクセント型	比率
平板式	41.4%	－1型	16.0%
起伏式	58.6%	－2型	40.1%
		－3型	28.5%
		－4型	12.4%
		－5型	2.4%
		－6型	0.2%

【表2 『できる日本語 初級』 中全785語のアクセント型の傾向】

アクセント型	比率	アクセント型	比率
平板式	41.3%	－1型	11.7%
起伏式	58.6%	－2型	40.0%
		－3型	32.2%
		－4型	13.9%
		－5型	2.4%
		－6型	0.2%

【表3 『初級日本語 新装版』 中全1545語のアクセント型の傾向】

アクセント型	比率	アクセント型	比率
平板式	43.7%	－1型	14.3%
起伏式	56.2%	－2型	43.0%
		－3型	27.0%
		－4型	13.2%
		－5型	2.2%
		－6型	0.5%

4 先の調査と同様に、表では小数第二位切り上げ後の数値を表示している。また、アクセント上の揺れが存在する語が複数含まれているため、部分的にはあるがダブルカウントされた語の影響が数値上に表れている。

調査対象とした3冊の教科書全てで、起伏式アクセントの語の比率が平板式アクセントの語の比率を上回っており、また起伏式アクセントに該当する語の中では－2型アクセントの語が他のアクセント型よりも大きな比率を占める、という結果が得られた。この結果から学習者における－2型アクセントの多用という傾向の要因を推察するとすれば、学習の過程の中で起伏式アクセントの語が多いという認識が高まり、過剰般化によって本来アクセント上の核が存在しない位置にも下がり目を設定するに至った可能性がある。また、そういったアクセント核の設定に際しては、起伏式の語の中における－2型アクセントの比率の高さからさらに類推が働き、規範的な下がり目の位置が分からない場合には－2型アクセントで発音上の処理を行う、という経緯を辿っている可能性が考えられよう。初級教科書に起伏式アクセントの語が多く現れることが、台湾系学習者のアクセント上の特徴の生成要因として作用している可能性については既に陳（2016）で指摘されているが、本節では起伏式アクセントの語の中における－2型アクセントの比率の高さについて踏み込んで明らかにし、初級日本語教科書と台湾系学習者のアクセント上の特徴の関係についてさらに一歩進んだ論拠を提示しえたものとする。

一方で、調査対象とした日本語教科書はいずれも台湾系学習者のみに用いられている教材ではないため、これだけではなぜ他の言語を母語とする学習者と比較しても台湾系学習者に－2型アクセントの特徴が多く指摘されるのかについては十分に説明しきれていない。当然そこには母語の干渉が何らかの影響を与えているものと思われ、蔡（1977：92）の指摘する台湾語の八声の影響や、華語における軽声の影響等も複合的な要因として考えられる。リングフランカの変遷等を踏まえれば、これらの特徴がただ母語の干渉によって生じる特徴と断定することは困難であるが、同時に、他言語母語学習者との比較を踏まえれば教科書の語のアクセント上の傾向を単一的な生成要因と断定することもまた困難である。母語の干渉や教科書の傾向からの過剰般化等複合的な要因によってこのような特徴が生じているものと思われるが、これまでの多くの先行研究では母語の干渉以外の要因についてはあまり考察が及んでいないため、本稿ではその他の要因として初級教科書からの影響についても言及したものである。

以上から明らかになったと思われる点を簡略的にまとめると以下ようになる。

- 一、植民地期台湾に見られた一型アクセントの傾向は現代の台湾系学習者にはあまり確認されていない。
- 二、植民地期台湾に見られた－2型アクセントの特徴は現代の台湾系学習者にも大いに認められる。

三、現行の初級日本語教科書におけるアクセント型の傾向が学習者の過剰般化の要因となつて－2型アクセントの生成に影響を及ぼしている可能性がある。

なお、植民地期台湾における国語教科書に見られる語からアクセント型の傾向を同様の手法で調査することは困難である。これは、当時の教師の多くが九州出身であったと推測⁵され、九州方言の影響がアクセントにも一定の影響を及ぼしていたと考えられるためである。『みんなの日本語』等の初級日本語教科書に標準語アクセントで発声されているCDが付属している点や、多くの日本語教師が基本的には標準語アクセントで授業を行っている点から、現代の日本語教科書を用いた学習者が触れたアクセントを推し量ることはできて、当時の教育現場で教師がどのようなアクセントで教科書の語を発声していたかについては実定的根拠を示して論じることは困難であろう。そのため、ここでは植民地期台湾におけるアクセント上の特徴に現代にも連続している特徴と現代では見られない特徴があることを指摘し、教科書に見える語のアクセントが学習者の発話に何らかの影響を及ぼしている可能性が否定できぬということを指摘するに留めたい。

4. 植民地期台湾及び現代台湾系学習者の音声に見えるその他の特徴

植民地期台湾における発話には、アクセント以外にも音声上の様々な特徴があったことが報告されている。本節では、まず植民地期台湾において誤用、あるいは方言として報告されている用例を一覧的にまとめた上で、現代の台湾系学習者の誤用と対照し、その特徴について考察を加えたい。

4-1. 植民地期台湾において確認された用例

〈子音交替〉

ダ行→ラ行

「かけだそお」→「カケラソオ」（山口1903）

「下さい（ください）」→「クラサイ」（寺川1942）

「ください」→「クラサイ」（平松1943）

「子供（こども）」→「コロモ」（寺川1942）

5 当時の日本人教師の中で地方出身者が占める比率については、管見の限り資料が残されていない。そのため、この部分に関しては台湾に在住していた内地人全体の出身地が示されたデータから推し量らねばならないであろう。台湾総督官房臨時国勢調査部（1937）によれば、九州6県出身者で実に44パーセントの内地人人口を占めており、このような九州出身者の比率を踏まえれば、教師においても特に九州方言からの影響があったことが推測されよう。

「子供」→「コロモ」(平松1943)

「台所 (だいどころ)」→「ライロコロ」「ライドコド」「ライロコド」「ダイロコド」「ダイロコロ」(寺川1942)

「談判 (だんぱん)」→「ランパン」(寺川1942)

「出会います (であいます)」→「レアイマス」(山口1903)

「電気 (でんき)」→「レンキ」(寺川1942)

「電報 (でんぱう)」→「レンポー」(寺川1942)

「獨逸 (ドイツ)」→「ロイツ」(寺川1942)

「道德 (どうとく)」→「ロートク」(寺川1942)

「泥だらけ (どろだらけ)」→「ロロダラケ」「ドロララケ」(山口1903)

「どろだらけ」→「ドロララケ」(齊藤1943)

「泥棒 (どろぼう)」→「ロロボー」「ロドボー」(寺川1942)

「死んだ (しんだ)」→「シンラ」(寺川1942)

「札 (ふだ)」→「フラ」(寺川1942)

「窓 (まど)」→「マロ」(寺川1942)

「宿 (やど)」→「ヤロ」(寺川1942)

ラ行→ダ行

「あたらしい」→「アタダシシイ」(山口1903)

「かしら」→「カシダ」(山口1903)

「麒麟 (きりん)」→「キディン」(寺川1942)

「栗 (くり)」→「クディ」(寺川1942)

「空 (そら)」→「ソダ」(寺川1942)

「台所 (だいどころ)」→「ダイドコド」「ライドコド」「ライロコド」「ダイロコド」(寺川1942)

「たいら」→「タイダ」(山口1903)

「泥棒 (どろぼう)」→「ドドボー」「ロドボー」(寺川1942)

「ねらい」→「ネダイ」(山口1903)

「晴れる (はれる)」→「ハデル」「ハデドゥ」「ハレドゥ」(寺川1942)

ザ行→ラ行

「じてんしゃ」→「リテンシャ」(山口1903)

「じんりきしゃ」→「リンリキシャ」(山口1903)

「ぞくのどくや」→「ロクノロクヤ」(山口1903)

「わざわざ」→「ワラワラ」(山口1903)

ザ行→タ行

「こじき」→「クチキ」(山口1903)

ザ行→ダ行

「ぞくのどくや」→「ドクノドクヤ」(山口1903)

ラ行→ザ行

「じんりきしゃ」→「ジンジキシャ」(山口1903)

ラ行→ナ行

「しらない」→「シナナイ」(山口1903)

「てらまいり」→「テナマイリ」(山口1903)

「てならい」→「テラナイ」(山口1903)

「ふらない」→「フナナイ」(山口1903)

ナ行→ラ行

「しらない」→「シラライ」(山口1903)

「てならい」→「テラライ」「テラナイ」(山口1903)

「まもなく」→「マモラク」(山口1903)

マ行→バ行

「しまい」→「シバイ」(山口1903)

「じめん」→「じんべん」(山口1903)

「じんむ(神武)」→「ジンプウ」(山口1903)

「つもり」→「ツボリ」(山口1903)

「まんなか」→「バンナカ」(山口1903)

バ行→マ行

「ほかけぶね」→「オカケムネ」(山口1903)

セ→シェ

「せんせい」→「シェンセイ」(平松1942)

ゼ→ジェ

「ぜに」→「ジェニ」(平松1942)

〈母音交替〉

e→i

「きげんせつ」→「キゲンシツ」(山口1903)

「けしき」→「キシキ」(山口1903)

「けんざん」→「キンザン」(山口1903)

「じめん」→「ジンベン」(山口1903)

「せっけん」→「シッキン」「シッケン」(山口1903)

「せんそお」→「シンソオ」(山口1903)

i→e

「てんぴんぽお」→「テンペンボオ」(山口1903)

「はいる」→「ハエル」(山口1903)

「ゆうびん」→「ユウベン」(山口1903)

o→u

「こじき」→「クチキ」(山口1903)

「こしらえて」→「クシラエテ」(山口1903)

「こわれて」→「クワレテ」(山口1903)

「そだてます」→「スダテマス」(山口1903)

「ほね」→「フネ」(山口1903)

「もん」→「ムン」(山口1903)

i→u

「しずかに」→「スズカニ」(山口1903)

「すこし」→「スコス」(山口1903)

〈連声に関わるもの〉

「寒鴉 (かんあ)」→「カンナ」(寺川1942)

「禁煙 (きんえん)」→「キンネン」(寺川1942)

「親愛 (しんあい)」→「シンナイ」(寺川1942)

「千円 (せんえん)」→「センネン」(寺川1942)

「本意 (ほんい)」→「ホンニ」(寺川1942)

「本院 (ほんゐん)」→「ホンニン」(寺川1942)

「本を」→「ホンノ」(寺川1942)

「温和 (おんわ)」→「オンナ」(寺川1942)

「緩和 (かんわ)」→「カンナ」(寺川1942)

〈拍認識〉

「います」→「イマス」(山口1903)

「おおきい」→「オキイ」(山口1903)

「しょおにん」→「ショニン」(山口1903)

「じんむてんのお」→「ジンムウテンノ」(山口1903)

「とおい」→「トイ」(山口1903)

「とおち (当地)」→「トチ」(山口1903)

「とおったり」→「トタリ」(山口1903)

「とおふう (道風)」→「トオフ」「トフウ」

「へえたい」→「ヘタイ」(山口1903)

「ゆうがた」→「ユガタ」(山口1903)

「よおじ」→「ヨジ」(山口1903)

「よおに」→「ヨニ」(山口1903)

「いっしょに」→「イッショオニ」(山口1903)

「お (尾)」→「オオ」(山口1903)

「おき (沖)」→「オオキ」(山口1903)

「きょねん」→「キョオネン」(山口1903)
「くがつ」→「クウガツ」(山口1903)
「しゅじん」→「シュウジン」(山口1903)
「けしき」→「ケエシキ」(山口1903)
「じんむてんのお」→「ジンムウテンノ」(山口1903)
「そおとくふ」→「ソントクフウ」(山口1903)
「め(目)で」→「メエデ」(山口1903)
「ゆき」→「ユウキ」(山口1903)

「きて」→「キッテ」(山口1903)
「いて」→「イッテ」(山口1903)
「みたり」→「ミッター」(山口1903)
「おっかさん」→「オカサン」(山口1903)
「かえって」→「カエテ」(山口1903)
「たって」→「タテ」(山口1903)
「しゅったつ」→「シュタツ」(山口1903)
「いって」→「イテ」(山口1903)
「ひっぱって」→「ヒパテ」(山口1903)
「とおったり」→「トタリ」(山口1903)
「かけっこ」→「カケコ」(山口1903)
「のぼって」→「ノボテ」(山口1903)
「のった」→「ノタ」(山口1903)
「ろっぽん」→「ロホン」(山口1903)
「とって」→「トテ」(山口1903)
「まっくら」→「マクラ」(山口1903)
「まっかな」→「マカナ」(山口1903)
「ちっとも」→「チトモ」(山口1903)
「ざっと」→「ザアト」(山口1903)

「しめん」→「ジンメン」(山口1903)
「じゅんさ」→「ジュンサン」(山口1903)
「たいらに」→「タイランニ」(山口1903)

「なんぎお」→「ナンギンオ」(山口1903)

「ひゅうがのくに」→「ヒュウガンノクニ」(山口1903)

「にさんまい」→「ニサマイ」(山口1903)

「かばん」→「カバ」(山口1903)

「どんな」→「ドナ」(山口1903)

〈促音化〉

「たくさん」→「タッサン」(山口1903)

「おくさん」→「オッサン」(山口1903)

「やくしょ」→「ヤッショ」(山口1903)

「がくしゃ」→「ガッシャ」(山口1903)

「ひゃくしょお」→「ヒャッショオ」(山口1903)

「やくそく」→「ヤッソク」(山口1903)

「新井白石」→「アライハッセキ」(山口1903)

〈撥音化〉

「うんどおかい」→「ウンドンカイ」(山口1903)

「そおとくふ」→「ソントクフウ」(山口1903)

〈清濁〉

「みずがめ」→「ミツカメ」(山口1903)

「まつります」→「マズリマス」(山口1903)

「ひつじ」→「ヒズリ」(山口1903)

「みつぎもの」→「ミズキモノ」(山口1903)

「みつばち」→「ミズバチ」(山口1903)

「たずな」→「タツナ」「タスナ」(山口1903)

「けずります」→「ケツリマス」(山口1903)

「しめん」→「ジンメン」(山口1903)

〈子音の添加〉

「きをつけ」→「キヨツケ」(山口1903)

「あんないしゃ」→「カンナイシャ」(山口1903)

「えび」→「ヘビ」(山口1903)

「おそい」→「ホソイ」(山口1903)

〈子音の脱落〉

「にぎやか」→「ニイヤカ」(山口1903)

「はまぐり」→「アマグリ」(山口1903)

「かぶと」→「アブト」(山口1903)

「つよい」→「つをい」(川見 1942)

「へび」→「エビ」(山口1903)

「ほかけぶね」→「オカケムネ」(山口1903)

上に示した例からも明らかな通り、植民地期台湾における発話においてはアクセント上の特徴以外にも多数の特徴が存在していたと思われる。しかし、中間言語や誤用はその性質上可変的であるため、これらの特徴がある段階においてのみ見られた特徴に過ぎないという可能性も否定できない。ただ、山口喜一郎が領有初期に台湾総督府国語学校で採集した用例から、領有中期、後期に寺川喜四男が高等女学校で採集した用例まで一貫して類似した類の用例が確認できるため、教授法の変遷、年齢の差異を踏まえてもこのような特徴が継続的に存続していたと考えられよう。

寺川は「コドモ」、「コロモ」の例を提示した上で、これらの音声的特徴が意味の認識に影響を及ぼしうることを指摘し、台湾方言を「言葉の識別上労多きものであり、一々話の前後の関係や其時の事情や話者の態度などによつて判断せねばならない不便な言語」と位置づけている。安田(2006:125)は、帝国大学の国語学の磁力から自由であったために寺川は方言として植民地期台湾の言語状況を位置づけ「『誤謬』とみなすことなく植民地で話される『国語』の観察ができ」たのであり、「そして方言だからといって『矯正』を行えと寺川は主張していない」とまとめているが、寺川が台湾方言に対して行った「労多きもの」、「不便な言語」という位置づけを踏まえれば、必ずしもこのような認識は適切なものとは言い難いように思われる。

確かに、寺川は植民地期台湾における言語の諸特徴を山口喜一郎らのように外国語学習者の単なる誤用、誤謬とは捉えていない。しかし寺川(1942:109)はまた、「[d]と発すべきところを[l]と発したり[l]と発すべきところを[d]と発したりすることは、正確なる日本語ではなく一種の「訛音」なのである」と述べており、このような特徴を有

する言語は「正確なる日本語」ではないと述べている。この指摘を踏まえれば、寺川は植民地期台湾に見られる言語上の諸特徴を「方言」として捉えているが、それは一方で「不便な言語」であり「正確なる日本語」ではない、という複雑な立場を採用していることになる。つまり「方言」だからといって必ずしも植民地期台湾における特異な言語使用を肯定的に受け止めているわけではないため、むしろこれは植民地における日本語のみを対象に「誤用」、「誤謬」と指摘した山口喜一郎よりもより広く厳しい態度で、非「正確なる日本語」としての「方言」を問題視しているとも考えられるのである。このような側面を踏まえれば、近年社会言語学等の立場から多く示されている、言語ナショナリズムの時勢にあって植民地における言語に内地方言と同様の地位を与えた寺川喜四男なる人物的位置づけは大筋で認められるものの、再考の上で、より細やかな検討を加える余地があると思われる。

また寺川（1942：106－107）は〔d〕と〔l〕の混同に話者の「教養」が関係するとも述べているが、この点については寺川の言う「教養」なる語の指し示す内容が不明瞭であるために詳細な検討は困難であろう。

4－2．現代における台湾系学習者の発話において確認された用例

以下に示す用例のうち、特記なきものは稿者による採集である。採集の対象となったのは先にも紹介した江東区文化センター内「プランタンにほんごきょうしつ」に調査時点で在籍中、あるいは過去に在籍していた生徒たちの発話であり、音読中の発話、教師と生徒あるいは生徒同士の雑談中に聞かれた例を記録したものが大半である。

ダ行→ラ行

「池田先生（いけだせんせい）」→「イケラセンセイ」

「腕（うで）」→「ウレ」

「課題（かだい）」→「カライ」

「花壇（かだん）」→「カラン」

「九段下（くだんした）」→「クランシタ」

「俵田來未（こうだくみ）」→「コウラクミ」

「相談（そうだん）」→「ソウラン」

「大根（だいこん）」→「ライコン」

「台所（だいどころ）」→「ライドコロ」

「暖房（だんぼう）」→「ランボウ」

「泥棒（どろぼう）」→「ロロボウ」

「値段（ねだん）」→「ネラン」

「みたらし団子（みたらしだんご）」→「ミララシランゴ」

「ラクダ」→「ラクラ」

ラ行→ダ行

「占い（うらない）」→「ウダナイ」

「辛い（からい）」→「カダイ」

「からっぽ」→「カダッポ」

「カラス」→「カダス」

「体（からだ）」→「カダダ」

「観覧車（かんらんしゃ）」→「カンダンシャ」

「暗い（くらい）」→「クダイ」

「苦勞（くろう）」→「クドウ」

「ケロロ」→「ケドド」

「信頼（シンライ）」→「シンダイ」

「スリッパ」→「スディッパ」

「千と千尋の神隠し（せんとちひろのかみかくし）」→「セントチヒドノカミカクシ」

「薔薇（バラ）」→「バダ」

「平井先生（ひらいセンセイ）」→「ヒダイセンセイ」

「恋愛（れんあい）」→「デンアイ」

ザ行→ラ行

「家族（かぞく）」→「カロク」

「自転車（じてんしゃ）」→「リテンシャ」

「惣菜（そうざい）」→「ソウライ」

ザ行→タ行

「家事（かじ）」→「カチ」

「工事（こうじ）」→「コウチ」

ラ行→ナ行

「辛い (からい)」→「カナイ」

「暗い (クライ)」→「クウナイ」

「分からない (わからない)」→「ワカナナイ」

マ行→バ行

「カマキリ」→「カバキリ」

「鬼滅 (きめつ)」→「キベツ」

「姉妹 (しまい)」→「シバイ」

「消滅 (しょうめつ)」→「ショウベツ」(張 1991)

「沈黙 (ちんもく)」→「チンボク」(張 1991)

「睡眠 (すいみん)」→「スイビン」(張 1991)

「任務 (にんむ)」→「リンブ」(張 1991)

「濃霧 (のうむ)」→「ノウブ」(張 1991)

「秘密 (ひみつ)」→「ヒビツ」(張 1991)

「美味 (びみ)」→「ビビ」(張 1991)

「未満 (みまん)」→「ビバン」(張 1991)

「未来 (みらい)」→「ビライ」(張 1991)

「迷信 (めいしん)」→「ベイシン」(張 1991)

「目標 (もくひょう)」→「ボクヒョウ」(張 1991)

バ行→マ行

「梅花 (ばいか)」→「マイカ」(張 1991)

「媒介 (ばいかい)」→「マイカイ」(張 1991)

「売買 (ばいばい)」→「マイマイ」(張 1991)

「漠然 (ばくぜん)」→「モクゼン」(張 1991)

「美人 (びじん)」→「ミジン」(張 1991)

「冒険 (ぼうけん)」→「モウケン」(張 1991)

〈母音交替〉

e → i

「喧嘩 (けんか)」→「キンカ」

「声（こえ）」→「コイ」

「粘土（ねんど）」→「ニンド」

「迷路（めいろ）」→「ミイロ」

$i \rightarrow e$

「会いたい（あいたい）」→「アエタイ」

$o \rightarrow u$

「遊ぶ（あそぶ）」→「アスブ」

「ベッド」→「ベッドウ」

「寝よう（ねよう）」→「ネユウ」

$u \rightarrow i$

「少し（すこし）」→「シコシ」

〈連声に関わるもの〉

「三千円（さんぜんえん）」→「サンゼンネン」

「全員（ぜんいん）」→「ゼンニン」

「本を（ほんを）」→「ホンノ」

〈拍認識〉

「大きい（おおきい）」→「オキイ」

「お姉さん（おねえさん）」→「オネサン」

「氷（こおり）」→「コリ」

「遠くに（とおくに）」→「トクニ」

「雨（あめ）」→「アアメ」

「走って（はしって）」→「ハシイッテ」

「忘れた（わすれた）」→「ワスウレタ」

「切手（きって）」→「キテ」

「取って（とって）」→「トテ」

「そっと」→「ソト」

「青（アオ）」→「アンオ」

「箱根（はこね）」→「ハンコネ」

〈促音化〉

「国語（こくご）」→「コッゴ」

「国産（こくさん）」→「コッサン」

「落語（らくご）」→「ラッゴ」

〈清濁〉

「ありがとう」→「アリガドウ」

「階段（かいだん）」→「カイトン」

「授業（じゅぎょう）」→「ジュキョウ」

「時計（とけい）」→「トゲイ」

〈子音の添加〉

「音（おと）」→「ホト」

「面白かった（おもしろかった）」→「ホモシロカッタ」

「恋愛（れんあい）」→「レンカイ」

〈子音の脱落〉

「買い物（かいもの）」→「アイモノ」

「携帯（けいたい）」→「ケイアイ」

「子ども（こども）」→「コオモ」

「好き（すき）」→「スイ」

「台風（たいふう）」→「タイウウ」

上に示した現代の台湾系日本語学習者の用例の中には、「自転車（じてんしゃ）」→「リテンシャ」、「全員（ぜんいん）」→「ゼンニン」のように植民地期台湾における用例にも同様の特徴が認められる例がそのまま残存している例も見られ、植民地期台湾から現代まで準同質的に連続する部分が存在することが明らかになった。これは、日本語音声指導書

等における「中国語話者（特に南部や台湾の人）などで、日本語のラ行とダ行、ナ行の区別が問題になることがあります」⁶との記述とも合致しているが、寺川がダ行、ラ行の混同について述べた後に「他の色々な音質に於ても大に行はれる」としている通りラ行、ダ行、ナ行のみならず様々な音声的特徴が見られた。むろん、これらも学習が進むにつれて、規範的な発声に近づいていくため、このような特徴が固定化して常に聞かれるわけではないが、学習の初期～中期段階やリラックスした状況等における発話では多くこのような発声が聞かれた。ここからは台湾系日本語学習者の音声習得上通時的な難点が存在していることがうかがえ、台湾系日本語学習者を対象とする日本語教育においては特にこれらの部分に重点を置いた教育が行われる必要があることを示唆しているものと思われる。また、[d]と[l]の混同に話者の「教養」が関係するという寺川の指摘は現代の学習者の発話には確認されなかった。「教養」の意味するところが不明であるため断定的に述べることは出来ないが、稿者の採集の対象となった「プランタンにほんご教室」の生徒は、地域在住日本語学習者の支援機関であるという性質上、法務省告示日本語学校と比較しても経歴や学力の面で多用な背景を有する生徒が在籍している。母国では最低限の教育しか受けてこなかったが配偶者の職務上の都合から日本国内に居住することになったという生徒から、父母が現職の研究者であり自身も博士号を取得しているという生徒まで知的背景は様々であるが、いずれの生徒にも同程度の割合で[d]と[l]及び他の音声上の混乱が確認された。このような点を踏まえれば、植民地期台湾における寺川の指摘は少なくとも現代の学習者には見られない傾向であると考えてよいのではなかろうか。

また、植民地期台湾における音声的特徴として確認された「せんせい」→「シェンセイ」や「ぜに」→「ジェニ」のような例は少なくとも稿者の採集、調査の範囲においては確認されなかった。むろんこれが調査対象とした学習者の個人差に関わる問題であることも否定できないが、「せ・ぜ」を「しえ・じえ」と発声するという特徴は、九州方言に古音の残存として聞かれる特徴と一致しているため、当時台湾に居住した内地人の多くが九州出身者であった影響からこのような特徴が生じた可能性も考えられる。

以上から明らかになったと思われる点について以下に簡略的にまとめる。

- 一、植民地期台湾に見られた子音交替等の音声上の特徴の多くは現代の台湾系学習者の発話にも類似した特徴が聞かれるため、台湾系学習者の音声習得には通時的に共通している難点が存在している可能性が高い。
- 二、[d]と[l]の混同に話者の「教養」が関係するとの寺川の指摘は少なくとも稿

者の観察の限りにおいては現代の台湾系学習者に確認されない。

三、「せ・ぜ」を「しえ・じえ」と発声する類の例は現代の台湾系学習者にはあまり聞かれず、九州方言の影響を受けた植民地台湾特有の特徴であった可能性がある。

5. おわりに

植民地期台湾における音声上の特徴を、現代の台湾系学習者と対照することで、その特徴の連続性及び非連続性について着目し考察してきた。繰り返しになるが、植民地期台湾における内地人の観察は音声資料としては制約が多く、その実態をどの程度反映し得ているか疑問が残る部分がある。しかしその一方で、リングフランカや教授法等が異なる植民地期と現代の台湾系学習者の日本語習得に連続性と非連続性が存在することを示唆し、日本語教育史領域における用例の通時的対照という手法の可能性を提示する上では一定の成果を挙げられたものではなかろうかと思う。

ここに明らかになったような学習者の言語習得の通時的困難について日本語教育の実践者が十分に認知した上で指導にあたることは言わずもがな今日の実践的課題であるし、過去のある時点（植民地期）に特有の言語的特徴を明らかにすることは教授法、教材・教具の妥当性の検証にもつながりうるだけでなく、日本語史的な知見の創出にもつながりうると言えよう。

また、植民地期台湾の用例と現代の台湾系学習者の用例を通時的に対照するという手法に加え、同時代的な性質を有す他の植民地における用例を共時的に対照することでより詳細な知見を得られるものと思われる。この点について深く掘り下げ、日本語教育史における当時の言語状況、言語教育状況の見直しを行っていくことを今後の課題とすることも付記して本稿を閉じることとする。

参考文献

- 磯村一弘（2009）『国際交流基金日本語教授法シリーズ2 音声を教える』、国際交流基金
- 川見駒太郎（1942）「台湾に於いて使用される国語の複雑性」（『日本語』二卷三号）
- 蔡茂豊（1977）「中国人の日本語における音声教育 第四章台湾式日本語アクセント」（『東呉大学東方語文学系学報東呉日本語教育』第2号 pp76~96）
- 張柏滄（2012）「台湾閩南語における日本語の考察」、国立高雄第一科技大学修士論文
- 張雪玉（1991）「台湾人話者によるバ・マ行の漢語音の誤読問題：ダ・ナ・ラ行の漢語音にも触れて」（『東北大学文学部日本語学科論集』1巻 pp107~119）

- 陳冠霖（2016）「台湾における日本語『－2型アクセント』の生起の要因についての一考察」（『日本語・日本文化研究』26号 pp92~102）
- 寺川喜四男（1942）『台湾に於ける国語音韻論』、台湾学芸社
- 平松誉資事（1942）『大東亜共通語としての日本語教授の建設』、光照會
- 安田敏朗（2006）『「国語」の近代史 帝国日本と国語学者たち』、中公新書
- 山口喜一郎（1903）「国語教授の際に気付きし児童発音の誤りに就きて」（『台湾教育学会雑誌』十七号）

